

# 日本と中国の両方に 有益な情報を 発信していきたい

——昨年、段さんが編集・刊行されたデータブック『在日中国人大全』を読んで驚きました。ここにはハイテク企業の経営者、学者、研究者、気功の専門家、とさまざまな人材のデータが950ページにもわたって掲載されています。

「ニュー華僑」の方々の新しいパワーを感じました。  
「そこには約1万人のデータが載っていますが、実にバラエティーに富んでいるでしょう。日本で活躍する中国人というと、飲食店の経営者というイメージが強いかと

思いますが、実際はそれだけではないのです。私は中国人として、ぜひともそのことを日本の方々に知ってもらいたい。同時に同胞の実績を記録しておきたいと考えて取り組んだものです」  
——段さんが日本にいらしたのは91年。もう8年以上住んでおられるわけですが、来日のきっかけは何だったのですか。  
「私の妻が先に日本に来て住んでいたからなんです。北京で英語の通訳をしていた妻は、海外志向を強く持っていて、89年に日本に住むチャンスを見つけました。彼女から『仕事のプラスになるから、

あなたも来て日本の様子を見てみたら?』と誘われて、私も住んでみようかと決意したのですが、実はそれまで勉強不足で日本にあまり興味は感じていなかったんです」  
——北京での段さんのお仕事は?  
「『中国青年報』という若者向けの全国紙の記者兼編集者をしていました」  
——首都の新聞記者、というのは花形職業の一つではないですか。  
「ええ、若者のあこがれの仕事といえるでしょう。私の実家は湖南省の農家ですが、北京の大学で新聞記者になるための専門教育を受けたのです。来日を決心した91年は、日本のバブルが終わる一方で、中国の経済成長がクローズアップされた時期です。当時私は33歳。新聞では1面、2面の編集責任者でもあり、自分の立場を非常に恵まれたものだとして自覚していました。それが日本に行くことすべてゼロからのスタートになります。正直言ってみると、迷う気持ちは大きかったですね」

——それでも行ってみようと考えたのは、何が大きかったのですか。  
「『自由』の魅力ですね。日本には、頑張れば道が開ける自由があると思いましたが」  
——中国ではそうはいかなかった?  
「今は中国もかなり自由でフェアな雰囲気になっていますが、8年前は、一生懸命やっても、そうでなくとも給料は同じというようなところがありました。ちょうど天安門事件も経験した頃でしたし、いったん外に出て、祖国を見つめ直してみたいという欲求は大きかったです」  
——日本での生活をどのようにスタートさせましたか。  
「まずは働きながら大学に通えるように、と頑張りました。来日2年目までは本当によく働きましたよ。土日は朝の8時から深夜12時まで、お寿司屋さんや居酒屋でかきもちのアルバイトをしたんです。妻と二人で住んでいた場所は、巣鴨にある4畳半のアパート。入り口にいちばん近い部屋だったので、住人たちの足音が響きまわってね。お風呂がないので、銭湯によく通いました」



21世紀を目前にした今、  
経済発展を続ける中国への注目度は日々、高まっている。  
そのような世の中の動きに呼応して、  
日本では「ニュー華僑」と呼ばれる  
若手の在日中国人の活躍が目立ってきた。  
来日8年になる段躍中さんは、日本で活躍している  
中国人たちの綿密なデータを収集・発信している。  
新たな日中ネットワーク作りに力を注ぐ  
段さんのまなざしは、  
将来に向かって真っ直ぐに注がれている。

# 段躍中

インタビュー | 清野由美 撮影 | 鶴田孝介

——「やっぱ最初は迷いましたよ。扉を開けたらハダカの人たちがいっぱいいるんですから。とりわけバンダイに座っているおじちゃんやおばちゃんにはびっくりしました。あれは中国人にとっては、一つの壁ですね。でもいったん慣れたら今度は銭湯が大好きになりました。本当は節約しなければならぬのに、銭湯が楽しみになってしまっただけで、よく通いました。銭湯好きが高じて、銭湯に置いてあるミニコミ誌に投書までしたんですよ。『銭湯には日本人のコミュニケーション文化が集約されている』って」  
——さすがにジャーナリストらしい

「さすがにジャーナリストらしい

いですね(笑)。

「そう、私は投書が好きで、ほかにも全国紙、地方紙、スポーツ紙と今まで200本くらい投書をしました。もちろん銭湯のことだけじゃなくて(笑)、日中関係から旅の感想まで幅広いテーマで。私は日本語を独学で学びましたが、投書を書く勉強に最適です。たとえ完全な文章でなくとも、プロの編集者が添削し、掲載してくれるわけですから。それに、もし私が投書を採用する側だったら、やはり外国人の意見には注目すると思うんですね。だから中国にいる日本人の友人にも『中国語をマスターしたいのなら投書をしなさい』と勧めているんですよ」

——段さんの日本語は、きれいで、はっきりしていて、これが独学とは驚きます。投書以外にはどのような勉強をされたのですか。

「あとはいい友達を作ることです。私は恥ずかしながら、いろいろな人に声をかけてきました。今まで出会った人たちは、こちらが間違っていると丁寧に直してくれたりして、皆、親切でした。特にアルバイトで勤めていた居酒屋の大将は忘れられません。ある時私は『おいしいです』と『おいしいですよ』の違いがどうしても分からなかったんです。そうしたら大将がわざわざ料理を作って、目の前に置いてくれて、『食べる前は『おいしいです』じゃなくて『おいしいですよ』なんだよ』と教えてくれて、それで『ああ、なるほ

ど』と理解できたんです」

——その大将はまさに日本人の心意気を持った人ですね。

「でしょう。私は寅さんの映画も大好きなんです。寅さんのやさしい人柄と、旅する姿にとっても共感するんです。もし中国に帰ることになったら、寅さんのビデオシリーズは絶対持って帰ろう、と心に決めています(笑)。それと日本の歌謡曲もいいですねえ」

——「SPEED」とか、ですか。

「いえ『SPEED』や『モーニング娘。』ではなくて、小林幸子とか和田アキ子(笑)。ポップスではなくて、歌謡曲、演歌が好きなんです。紅白歌合戦は毎年、必ず見ます」

——きっと中国人と日本人の間には、相通じる心情があるんでしょうね。

「それはそう思いますよ。例えば日本語にも『故郷に錦を飾る』という言い方がありますが、中国にもまったく同じ表現があります。私がこうして日本で新しいことに挑戦しているのも、そのような思いがとても強いからです。さらに中国人は『面子』を非常に重要視します。日本の方々は中国人密航者や不法就労者のニュースを聞いて、なぜ命の危険まで冒してそんなことをするのかと、驚かれます。思います。あれも面子精神の現れなのです。一度、祖国を出る際には、後には戻れない、何としても成功しなければ、という気持ちなんです」



取材や原稿執筆、また編集作業と目の回る忙しさの段さんだが、出版事業への情熱は衰えることがない。近々、在日中国人の体験記『中国人の日本奮闘記』(日本語版)を発行予定。

——その段さんが見つけた、日本で暮らす意味とは何なのでしょうか。

「東京に住むようになってから、祖国への愛情、親しみはどんどん大きくなっています。もちろん東京の方が物質面、サービス面、また社会治安の面でも優れているのですが、逆に祖国の立ち遅れた面を知らば知るほど、これからの発展に何とか寄与したいと思うのです」

——日本では物質的な豊かさの裏で、精神の貧しさの問題がクローズアップされていますが……。

「確かに中国でも、日本やアメリカの社会問題が論じられています。とはいえ、個人が自由な生き方を選べる社会を否定してはいけません。私親の世代は反日的な感情を抱きがちです。歴史的な経緯を考えると、それも仕方がないことではあります。実際に日本社会を見た私は、そのような考えをするわけにはいきません。日本のいいところも、悪いところも知ったうえで、バランスのよい意見を持たねば。そのうえで、日

本を批判するばかりではなく、日本を通して中国人が実現できることは何かを探っていききたいですね」

——その核が出版活動なのですね。

「やはりそれが、以前中国で新聞記者だった私が貢献できる分野だと思っからです。例えば今、日本では中国人の犯罪のニュースが多く報道されていて、マイナスのイメージが広がっています。でも犯罪に関わるのは中国人の中でも、わずかな人たちなのです。一方、中国の報道では、日本政府の右傾化問題がよく取り上げられています。これだつて日本にいれば、さまざまな意見があり、全体がそうではないことが分かりますが、中国ではそこまで伝わっていません。ですから今後は、同胞の実績や奮闘の記録だけでなく、情報発信と人々の交流にも力を入れていきたいですね。私の仕事は中国人のためだけではなく、日本人にとつても有益なものでありたい。それが、日中両国が将来築くべき、強い信頼関係に結びつくと思っているのです」

